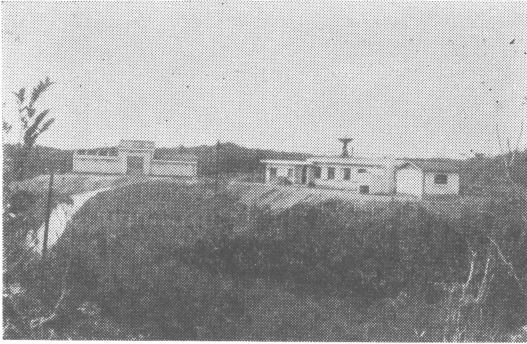


地方だより

名瀬測候所
本茶峠分室
ふんちやとらげ



昭和30年3月名瀬測候所に高層係が新設され、レーウィオン観測を開始したが、等感度方式の受信機で、高度の成果を上げるには、東西南方を10度以上の山で囲まれた測候所内では、電波の性質上極めて困難であり、又国際地球観測年には、日本最南端の高層観測所として、その資料は大いに期待される所となったので、昭和32年8月当分室に移転し、GMDによるゾンデ、レーウィオンの観測を行っている。

この本茶峠分室は、名瀬市を北東に去ること約11軒、標高300米の峠の頂上にあり、東は太平洋、西は東支那海が一望に眺められる。敷地は二町歩に及び、将来はレーダー基地も当所に予定されている。

写真に見える様にブロック建築平屋造りの庁舎及び気球充填室の明るい建物は、四方の眺めとマッチして、観光地的景観を呈している。総員16名で9時、21時にレーウィオンゾンデ、3時、15時にレーウィオン観測、世界日には4回共レーウィオンゾンデの観測を行っている。

観測結果は無線電話で、本所通信係に連絡することになっているが、勤務の交替、その他緊急連絡にはジープを使用している。

道路は県道ではあるが舗装は全然なく、路面の凹凸が多い上に狭いので、運転者も乗員も40分の通勤には疲労が多い。

奄美大島が日本復帰後整備されてない、海岸道路（山が迫っている）と山路だけに大雨ごとに崖崩れがしばしば起り、交通遮断の憂目に会う。飲料その他に天水を使用しているので、雨量がなければ困り、多雨量では交通の心配をしなければならない。移転後間もなく10号、14号台風に見舞われたが、特に14号では35時間余で437ミリの多雨量に達し、崖崩れ数カ所に及び、交通は全く途絶えたので約20分間途中舟を利用して通勤した。その後も徒歩又はバス乗継あるいは止むを得ない泊り込み等しばしば余儀なくされたが、将来も幾度か起るであろうこの災害にめげず、今迄と同様無事業務の遂行が出来る様祈っている。標高の点からいっても当然のことであるが、当地は風当りが極めて強い。特に台風の際は、平地の測候所より瞬間は約倍近くの風速になる。10号台風では60米以上の東南東風（写真気球充填室の左方が大体東南東）に達し、御覧の通り屋根が飛ばされ、GMDが転倒した。好天時は景観も極めて良く、しばし世の俗事等は海の彼方に忘れ去るに充分であるが、一度荒天ともなればわれわれの職務柄自然との激闘が始まったという感じが迫ってくる。

日本最南端、高層観測の前哨地として、将来共大いに期待されていることを、職員一同痛感し、ますます張り切っている。



(相徳幸智男 記)
(鈴木茂男 撮影)

☆

☆

☆

☆

☆

☆